曾根好忠歌集

へ4
2972

へ4
へ119
2.972
門へ4
洲2972
巻

宗教哲学図書

曾祢好忠家集

毎月集

あら玉のとしのはるをかさねてぞ
花なきとしの春のはるかな
かすむ山辺のさくらあたらしく
月日はすぎぬ人はとしをる
いとゞ乃隙なきさとの里なれど
きけそ乃われと哀なる音を
めぐりあひぬるとしとこそ
思へ人きうをつくり永日を
ゝこそ乃ゝとおきて花の春のいとゝ

二字イナシイ
木乃葉乃落る秋の松かへ。月乃あきらかな
る夏の夜。丸乃さひしき冬の暁なとては。イナシ
きゝるさるこゝハむこなれは。松やのかけて
しらまし。おつしたしれ人しこるか
はよさの海よ。老の浪よせかへるあきの
しつたれは人しみやらと捻。

春乃ちし紀

後拾春上

こゝしあかしは角ちこつるあしのね乃夜ひかりよ春のきよのわ

あけし河春山かけてくるまち志るしれともりハ水をあつめる

なる瀬乃岩ちしの氷いかなる人春のみ丸夜はよふくなかり

初春

花よはや今われいろしつるよ河つゝん軒の雪ゆの下乃玉水

雪きえハ高ねの河のほとり摘へきかれ春さへ晴ぬる山へ乃里

雪きえし花よ見の山のふくちえよたわし山川のとき堤ほと

新拾春上

しらわ春の見よはなかれてとる出やいつちるなん

山のかひ霞わたりしおりかけつる摘へき野へやしる念

うこ山乃瀬の出かとけるよしの花ハ雪のよりたる

野のかる入江乃出浅くきてそこみえしら先はよりわ

正月中

かつしかのかのとけしやはの浦をそ鳴らしなく
すみれ乃ゆかしく今はまへとかへらしいつこまさくなへて咲みえ
春は野に付きし乃ころ雪わかし今はつみよふへきはところ
梅の香りふるのやしろ乃神やつこ春まつよりもわかとかへりかやさし
あさしめ神のみてくらさせるかと咲つるまつのむれ居るへし
乃みわたと四方乃山へ乃はるさめいつれ木あしかし残るらん
うちはをうへきもとらぬ春のよ声をやしまてとまるなく

後拾於春上
根芹つむ春の沢田にをりたて衣のすそのぬれぬれそかき

新古今二
旅つまにをふるかきりねけて春まてへかさほのかにみて緑にたちえみしける 以上新古
同居の雪よきえすはつくさのいつるまさしん人を恋しき

正月後

新勅春上
朝ほらけ棹さす淀乃川せもくらけて八春をそ見なくて

後後撰雑上
船はさす今船の雪にて水つけ世をかさ積のゆらくへきつ渡
あさふらわ山への花は埋れて有らは知らぬかはらへきせん
にわかにをくはるむ梅の花を初春しむしと折てかさ見き
春すると沢へにまた芹の若紙年とたかそかしき摘たる
梅津川石への浪乃立へても春の花しらくらへれて
おりて深しやまらあらん春かれとかはるれはすらゆれ松の葉とかは
花の命もたらんねをの目と秋乃古枝ひやかけそかき
家にても年ふるかむかしの行の花はわかるまいくらんかは
山里は梅乃こ花を春のかいかあてかしん花こころてら

中春二月始

つきもこの夜きたるまよ丸きてあるしよ沼のうちもしらつ
ちやとのよ板井のあやめもしら底のうつ乃色すくせ
ちきつますうきさをわ春毎よそわさ手民の口さ
梅花今夜あるしのやうにうへ紫きてのこしぬすへきうか
つ乃月ぬいうしんすてしほうみ沈春もて唐子を代
ゆふきをよ沈けれ春へ柳乃いとうおこして

彩新春上
このちる春の山へ沈きそれ〳〵の夜こんなそおき
山住のうつき沼れるきこのろ雪沈をたよたてこうろ
文ものぬ沈の川乃をこつて世へ同しろくて沼こわ形春
樺ちきのぬこへこうれし入さの山へ月そさやけき

二月中

春は世のつくさ山よ立きこの今彩のち春よち沈笑てつる
松う清いつしこもちのよちをいとし春へ尾こ平ちたく
つやとのりとあこの橋さうねをん沈けてこれいこのり
沈さひつるこうの海士し春これいうくこるあを沼ろ
ちり毎こちふくち丸沈るすこて世をは寄よ紫てこうろ
烟こつ春のうこくこるけそすこんあ方あわうるる
あふこのかたをせちこ春のこよつるようけて年をつこ
をこ沈こうのさあきの松山し春へこわの海さ沼り世

彩古春上
あこ小田のこの古跡のつ蓬今へまへとひこえよ
春山よ本ところこの腰よさちきつきれや沈のあ方へ

新後拾春上

二月後

なく世とあくしそ思春秋へて九よろこう青柳の糸
乃うねうのうつる世中ぬらしとてし秋ハてそて
るくて浦くふの言うあうのひわより小焼て（夫本）
花の時ハさくらんうしの萩のやけ飛ハ（ふ夫本）へてうを
山桜やちなん吹風よ花の白をうつてしうん
つきるへ秋宿りうんよりを垂てつれハ花りう色きをまて（うう夫本）
春雨のふる乃う山の花ちてのこそ
花りうのうさの山ちてのこそ
花りうのく妹うつうるよくふれてふるすおうをようう（あイ）ぬ（ぬ）
ぬうつる原の洞のつりる沼やかりろ水よ人乃せくらん（たりの夫本）（人夫本）
冬月のうるれの弱しハ白ちてん昼一の沼てハえるとうら

菅春三月上

ちくこ橋やうしの乃月よ成ぬ小ハけねうしおつやぬ
花ううれ眺ハ春の山よ入てうのりと毎よおあ沼をひる
厳生ふやうの原ハようちむ小て沼ハうてつる里人
乃をうこそのうと思ふ春のしを花うけてんひぬる
物かく庭茅ようるこせうけうよ妹ク花ねハうけきよりわ
文本の焼生の萩し二（下条夫本）たうわうこうよ鳴ん花沼を思
花ようりと夜の風よ沼ねすハあやうく妹やんてうん
かうう月よ花うよきうふ大沼ハうの山ハこうわうを
父うんと独りうう山吹の旦ふうにて鳴うう花式
さうう花うよんのいうぬ小春ハ色しを花沼を言ぬる

三月中

国のとよ雀乃声そゆゑ出てゝ方よりや成なるん
花さくわあちらのまもゆるつゝはるのゝ歌をそ
玉ぼこの道乃湊の春乃風人の花をゝむしるる
ふるさとゝわこつてなれ花の折ゝそらへすゝそ
雪ゝりとこゝねゝ花のゝこゝらんかゝまとれハこゝを
花ゝんとたゝさしてしらぬ紙ゝ乃川なゝゝ風とそつけ
山姫のゝてはゝゝゝゝゝ衣ゝとゝゝゝ白ゝ雲てゝ
山ゝゝ風ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ春ハ色折てゝゝゝん
ゝゝ花ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

三月後

花さとゝ乃ふゝゝゝく春ゝ原折わ折ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ乃ふのゝつなゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝん月はゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝはてやゝふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝの浦乃ゝ河の乃ゝ乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
花川の早せゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
春ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
梅ゝゝ川春のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

四月

梅沢川。春のくれより。朝より庭乃若葉も
ほころびさく乃しら露。あけにしはる露
もゆるさとおもひまわ乃丸たのもしく
おもふはた乃。あられハやよひ過るもねぶるる
わかあら紙。なすけらるに。垣根に咲る。卯
花のさかりをしておぼえけるに雪とわけぬ
ほと卯きすいしり乃。ちらさぬむらひて。ちする
かけとをしく。ひとくたるに。あいてにしはるに
しあしん。早にしあそれ。若竹ら
なるむしなしとうしとにも川乃は

紅なるさ紙。移りし出えれに。名つけて。
ちらつむこうし乃か乃しきるに。世紙花り
うつくしふらあ行しとに。物乃こいふ東河
いと紙。友乃のく紙。そとかそるかも。
くるらすかきてつうらしてきもなき人の
なかれてれ世乃さまてしまるわけなき

四月初

御よろ卯月まで成れ神山のあらのそしかいつなきあれし
こそあつきまゑの若がくちけ見え今行きてせおかいきつさるす
水茶ならあさらの岩井立くれハつふさをひちて結ひあた
友乃はハなかさへもいくうきれなさやうへてる凱のをかてまひう

はるかのようねはやしもとゝるゝ小屋をたて
ぬへゝるゝ小まつく分の成よりわつ苗代しをそ
夏月の伊系のてかわきうきまきよろゝ小かく加よろゝ
世中の成ゝ庵て同しこゝ、つゝ小をこてゝゝ小をそ
ゝゝを山ちてゝゝをしす夏ゝ小いつこをゝくまゝこつゝ小わ
彩古夏
かわよゝをゝ小ゝ人の後ゝを者をゝよつけてゝのゝ小ゝ

四月中

大ゝゝゝの下者ゝゝ風ふけ小ゝ小きて稲をゝつわゝ
ゝゝ小ゝ川末ゝゝ者ゝゝゝ小ゝ小ゝ草今ゝ年のゝゝ末をいのゝ
やゝゝゝゝかゝゝ小ゝ小ゝ小ゝ小ゝ年ゝつで
ゝゝ者てこゝゝ布ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ほ秋雨一
ほゝゝゝ
ほ秋夏
夏衣三面川ゝのゝゝ乃ゝけ
ゝゝけゝむゝ
夏乃夜のゝけき雨ゝ足川の山の松風ゝ
小心夏
彩ほ秋き夏
あゝ乃ゝよゝゝて住ゝ
夏麻の下ゝの者のゝけさのゝは毎よ侍ゝ有ゝ

四月終

夏衣者ゝやゝの小ゝ小ゝ小ゝ人ゝ小ゝ
ゝゝねゝ印花ゝゝ人ゝ雨夜ゝ
ゝわよゝゝ人ゝよつけてゝゝ
蛙ゝく井ての者ゝ刈ゝすゝとつゝねゝあつ夜ゝ

はてしなくこゝきあるもの物恐しき立のメくらし
その中に流ちりて同しこゝ立けきる立ゞ伝うるのまむ
立つ〳〵てるハ行ねと山つの近ねのうつゝ霧ふかわ
まくしやくしのうちに人舟をしていくその立ゆたうしきを
舟中よハ〳〵ふ人乃こゝねをるへて立ゆしけをあひふを
立ねの蔭のねもわしたきゆて立ゆまりけてこつひわ

夏中六月初

はゆ文

こゝゆもうふ六月よ成ふわ色けや早苗老てこゝ色
行わ立てこのひとこゝ穴伝ゆこゝねのきくよ
ゆこゝて立六月の流乃ゆあゆ茶をゆ人の川てこゝふ
名ゆ中お人ハ形ふ伝ふ口ふ立ふ人ゆあふの立ふ

あゆ〳〵ふ賊のこゝふ戸ぬ伝くて付ゆあゆこゝ戸ふつゆる
伝ふ立ふ二戸の立ゆ伝ゆ蘭生の立ふくなわ伝立ゆて食ふ
民業生ふ少ゆ立この立ゆこゝわを雑ふ知へき
羽死文 松川のいこゝ伝床のふよ松立流こゝきふ所くけわ
ふけてすふゆふ行こゝおきゆ月雨をねこゝふまて乃手伝ふ
入ゆこゝふくふつきこの色きけハ安乃口易こゝなゆわけ

六月中

山つのハてよ刈ふ寸麦のこゝ乃こゝけて物伝ふ口ふ伝ふ
口ふ府こ麻芒ゆ伝ふねゆふふこハちえよ別て流こゝ流き
大系やセふ井の水ゆふきこゝて移わやくきこ流こかてふる
移こゝふふかけて川こ系ふわこもやこゝの立て流ハ

乃ちうにて海ちわりうをはしらひあつふとしなき為ハ
あにてし思へハうそハうを茅の岸をう中紙らてしうし
蜘乃なの蔭ら変よ成しちわいかとあう夜のうを吉ろ代
羽ちう下
きうわうてぬううしあくうを代ふの方ろの月ちうふきは
新清さい立のうをうて月をうてう舟しうそうろ
ワうせうろきうせわつううんをうを立のわ弟ち行ふしひ
せわ

又月絵

牧山田のううえせうわう天ようす岸ふの神代ねあうをなき
さら浪立ふすハうを流ふはく成しうをうを有うふ
庭うう流てくやうをうとうしハ形む立乃ゆううし
あうねす岸ふの山しうをんへく同ぬきふうてをわう立武

花前　春の山ふをしき動て立のはやわうふせてをふ
立ようせう麻てう形紙やふふ雪の人をうねを立をき
こうふ雪て烟しをすう立のはうをう笠ハかを流わけう
いふしうくうの思つあう宿ふ心すうをうをうを流き
うをうくく行のをふこのかをうを乃ふをつけてを立ハすき
ふしをゆく扇の丸しぬうふしハ園の水ようふしをしう

六月初

ふうわなをうの月ようふ成ねをてあうあう神ようを物うをなく
くハうわ茅をを立しふふしあうふようを動流茅生の露
羽花文
河ようふ立をうをうせくやなせのさ流うをうさくうわ

かこうねと蓬の色えうれてあをあらのやうに(をおひ)ぬけうせて
ちらちらとこけるる山間のうわすとそうそうに(ぬ)ぬきのつ
数(新古歌)やわ失れさ涙ふけてこの下こうれるやはらこうれすのこ
えハきの麻もそうらとあるこ(もえ)人のんうるさしいつれたれを
こえなすはらうけさこゆうえ山のひうの雨うやいうちうこん
ちうはすううううて立ぬるうすれいうう風ようれ任せて
さうら流うもてれうつう水のあやをえの川らの涼こうるを

六月中

ちうせうえのゆふ蓋こうハ涼しきうこうこうねふ(よう)ふし
ううとうねと泊てあせこきえうれ角をうねとやんハえ
ちゆうえ烟ちうこんえのはれ暑きぬううれ思てえぬう
つきもこううなく長ふ闇なれどえのひうハれをふううき
せうふれハ老ちうこんの白髪ハ数なしけせぬ者てそこうう
入はさしいつしうえのはうくれハ紛うち解て蛙とはませ
萩のちうれのそううくえなしうかて秋ううねた哀ちうう
きてこうう蛙うう家ハ(ほ於)人告ちうひうわうう庭えの花
えれのせうよ鮎つうふれううをつううき氣ハうてそ家
こうきれううえの川れふうらうし涼こうゆん蛙れ伴ひ

六月終

つきてこうけうをうつうねうわうこえのひうハうとうや家
下紅葉秋もこううよ文付ハてうえのはうこうれううして
えれはの(ゆのイ)水の面からす蓮(えれ本)うたうふ蓮の方れハうせん

いかなれ国乃さとより行てはるきなの影をもくらん
ひかるくもけきなの山ちかゆあるに越るこちのこして
詞花集
雲の行ておきて打とけぬ草村よ秋をかねて待ふつゆか
入はさしいてし乃ねをゆかしくまきこきねふてまなのゆふれ
夜ハわかなの川せなるてゝん古る人をんなれくらし
いにしへあやうくまさき菊乃かふしのねハ定なき世を
むかしのうきてさかふ大ゆを旅せてかよ夜ハふてし流

秋

涼しきし。夜乃くれまして夕。まかり。野
への草むらを。つさいふく。たちそよふさ
にこらしみ。やりふこきくなる

よまゆし月をも思日乃外よふるしや
あきらひなまよ分をきしんれらちよかけき
つらを七月おん末まるよ。耳よきし間
まかるこしをたつし於うそ。令下ハきし
ぬれとりのれてしぬこしまさを。あつ
まとく乃秋れ。てこしししくら。
うちつてきて〜ハ浦よくつるの名ハつきし天のもし主

初秋

初秋七月

山しろの鳥羽ちの西をふりて廿八かのた今船江秋風をふく
かつもすら秋ハきよ夕わ於わそもちよ苗つわ 袖ていはるるよ
まを山田にそよにてか安守作か垂てちるとせしかよ妹そうかね

月

彩古秋上 起てうんと思てうたゝは秋はゝわ雲もわけそ乃霧

月

秋をへてこそ升よきて八月の月てゝ清よ秋はあ天の星たゝ

そこのうゝまよゝまゝ三 国子用よきうゝ乃しりんし女こう天のゝ夜さ乃すゝんやて

まゝ乃サメ用 つゝ思ふ父よ八ゝうゝ乃てこの雲よんゝ乃おうゝへ山やて

蜉乃ゝの雁うゝき衣しうゝねゝ秋きてわを見てさわゝ雲

七月中

つゝふゝう中てのいねものきゝ八濃て麦村くゝか先出よゝう花

彩新秋上 久ゝうゝれ雲の間と清ゝうく秋乃月乃七

いつこゝよゝうゝく雲の秋はゝけゝてゝいゝふゝ乃人の色ゝうん

うゝめゝる玉ゝゝ乃ゝうん秋の秋ゝれ雲よゝ乃ゝきゝ寺ゝ乃ゝ白つゆ

ひまゝゝ

ゝゝやゝの門国のゝゝのひゝちゝ乃ゝゝうゝよ升てゝて紀八ゝてゝき

むゝてのゝをゝはゝ乃ゝ乃秋ゝきゝて行ゝうゝる國よゝうゝし

麦

こゝうゝの秋ゝゝゝよゝゝゝはゝわゝゝうゝのゝゝゝゝいゝねゝゝてなま

ゝゝゝくゝゝてゝきゝんゝゝゝゝの乃ゝ乃ゝ松ゝゝくゝゝ先なゝわ

彩秋

秋の乃雲村ゝうゝよ行くつゝゝ夜ゝ ゝゝの清ゝうゝ

行の上よ雲行よゝね行ゝうゝわゝ秋のゝのゝをゝ赤よゝゝゝや

七月後

ゝゝなゝ雲ゝゝゝゝゝゝ雲ゝ山ゝゝよゝつけてゝ穀ゝゝるゝゝ

彩古秋上 秋風のゝうゝよゝゝゝゝ言ゝ山ゝゝの雲ゝ乃ゝよゝけゝうゝゝゝき

於き郭秋 影子侯人不知

むつまゝきゝいゝり女の山ゝゝゝゝゝゝゝねゝやゝう秋きゝゝの言てかゝゝやゝう

ころ

十三

人ちとかしてふへき秋思ふ月ふるさと
秋をのみ乃まさ秋て吹ちぬ
うへ人乃秋て別れ秋ぬ秋まよわ
二葉にてうつ志の秋ちぬ
あ秋有りておけるのちをよ
大ひをあ秋ひしの山ち秋ぬ
秋を秋へしまかつ胆へとろな

八月上

ちるのちに代音まま言ちるを言て乃へのまとし秋指めうふ
ちのねを寄村ちるまをくちぬ世ちるぬ
ちつわ言ひしく思へ秋の乃やふの住家ハ長き宿ちを

秋ちるふし雨や亜てしうちんひこうちハへて守る山田秋
信古集 乃せをろ口ちを乃れ日冬わ夜をちる月の秋をかるき
うへのをてをしを秋をつて秋をハ伝の物ををきけ
をつ山天木の雨の萩ちる秋ちる形きちれちをを川
みををもちをを志ちれめちを思ふをいをを毛ちる萩の点つの
秋
くををひの御宮の山秋ふふ下茅けて文分をハわ
うちむれてをひるかのの七日風も天の川ちを出ちんを

八月中

とやをれ行文何の行ちわ秋きをハわ心有をしを
をを伝のをををを行ちをを行の風ををを寄あけき
茅つちり夜床ハ山を秋ぬをを秋のちを〳〵ちををへ

くれてとまてらちやはさ秋の月をてらの山乃陰はうとて
を月のこゝすら手よひうとはつるてくる秋てうすき
あけぬ行くてのそねをちらぶよ萩のちりわるとやーねるん
陰後祝高西
ひくこゑく風をたてる吹ゆくつるとしんを言つりて
於高三
つゆとてうきとされらひの秋風をねんをわとうらきは
こゝとせをの弱ゆるてるよあつけてひる秋のこ弱の世風
陰天高西
ふつらひの風ふるきくふちくこねんをれこゝしやい
まくすくく後六十月
きこうすい
八月後
ぬんき
うちのくるあのくるの山よ秋きわのうちの弱しちつきはんら
丈イ
彩秋於下
夜うつきあらの色ゆきくあへはきわ立ちよりをちくあう
於前夜
秋風はまくきかゆそつやのあくくせ蛙のいきは

風ふわうてはゆゆこをうよをくく秋のこふく
いさうたのくしかきよてねるくはよのとけき秋のはうわよ
ほ於秋上
なけやかけ蓮の秋のきわくすくしく秋はくそうふしき
丈木高西
分よきくく秋のくはのふくうよたすしんの多よたてけ
つゆ分そいつきしくねゆくよはは秋ゆそ行るつらある
いつしくを色はをせーさゆーくの色ふうきの秋ゆーなく
つせこの夜やのすけけてくんゆ秋はすんかき
九月上
彩ほ於秋下
いくくーく夜くを月よくわぬはねえちてゆすんくの
くくこくよ麻のーねゆゆーくも秋はふーきねくをくき
をやはは久よあはもくここ織をむ綿ちくん

秋丸のふくさ袋にわさ寸にとまて袋にきあをそ
彩色秋
ひとくさ丸と木葉ハちりてらかく虫色よりあるい
住吉の名所の名のたまつゝ数をゝん分ハ秋て高き
ゝ山ハ村とけきひくゝとゝろよつけて秋きわゝ
あのさ山ゝの中ゝ紅ゝ秋のゝゝ色わにき
老よゝゝちひとちゝてのふゝわきくのあゝとゝ秋ゝゝつ
まゝ山人ゝ色ゝあわゝ紅ゝゝせやゝゝゝる

九月中

雑子おくゝこの家ゝゝ木葉ゝゝゝゝゝゝゝゝ
つまゝこゝ袋ゝうすゝてゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ふゝねゝとて言ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
秋ハ
秋ハ

きゝゝたなきゝゝの八秋山ゝ丸のふきゝにけ きゝゝゝ
なゝ月の秋乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
丈丈高ゝ
ゝゝゝゝゝ山ゝ早くゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝゝゝの川せハ年つゝとゝて月はゝゝゝゝゝ
山さゝとハかゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
白秋
くゝゝゝ山秋の月ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
いゝゝゝゝ丸のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

九月終

ゝゝゝハゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ秋ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
彩色秋ト
入ハさすさゝの山ゝ秋ハ不ゝゝゝゝゝゝゝゝ

彰子院

外山なる三本のつくづくしき秋ふかみ
秋ふる山の梢とつきづきしうしろ人なる夜ぬるかな
ひとりぬる夜のね覚をねきて聞くに秋ちかくもつれてなる
田とやせ乃ゑやせるやうにてしらきねぶかく
ひとりすむ秋の山べは人のうの美なる夜の風なる
我れなるすあとの水せき留てしも秋ぞちかくなる
秋ぞつくるせ乃ゑ乃ゑ乃ゑ乃ゑ乃ゑ乃ゑ乃ゑ

冬

ちかく月。時雨ゆくるぞ山ふかし。風さえ
ぬるよ。なるる小行をたちの木葉。乃ゑ
利なく。ちかくもしるふ乃ゑ乃ゑ乃ゑ乃ゑ

なるる竹乃。ふるよ乃ふ
く。思ひあつる。くれ年。くれ乃冬
乃。有ぬ乃ゑ乃ゑ乃ゑ乃ゑ乃ゑ乃ゑ
ぬる乃ふるしぬる人の秋ぬ利も志
ら乃ゑ乃ゑ乃ゑ。ぬる乃ゑ乃ゑ乃ゑ乃ゑ
ぬる乃ゑ

うるゆ乃ゑ乃ゑ乃ゑ乃ゑ乃ゑ乃ゑ乃ゑ

初冬十月

初冬

おにてして行ん人ゆ秋有て行て月ぞ
志ぬるてくゆ乃ゑ乃ゑ乃ゑ乃ゑ乃ゑ乃ゑ乃ゑ
乃ゑ乃ゑ乃ゑ乃ゑ乃ゑ乃ゑ乃ゑ乃ゑ乃ゑ乃ゑ

野辺をすぎて行く末は松よりも今は弱げなるかな

同花枝

まがうかの冬をこそ春の玉と強せるしらきくの花

志ら菊は花うかべ きつねやとの国の枝をなるかな

白つゆのおらは玉ぬてよとわてねんをて書て思を

長よるをそまり出を見るよ今宵の月の書そふけ

風をこそ書こつるりし廉の枝をとつ上を思ふさわらん

新勅撰冬

露分て神をなれす秋を月石葉に雨と不わまれた

十月中

咲ちらす冬の風うら秋きは葉秋きあとのむ山人

人ゆるをそらし空一風の音秋つらうねの再なわ冬を

ひらわぬる丸の書をよ秋が月志ら不わ行 書を書き

こむら山木葉ぬ行 秋よりわあらふよるの玉うき

河上やうさきき秋やけ秋をこ言秋席ぬ冬すうたそく

わらしすう冬のうわ人まちねてこうんと宿をやおりふ

古郷の花ハまをそらしてしらはよりわとてしへふれ秋ねうん

岩ヶ山ちよ秋くまよ冬の天代国ちしらすを志ら秋む

文きあの月なうして冬の夜ハ世をしねるハさむうん

北本

十月終

冬つしハ行わうつ人とおうわ行わよ行う水のうへのあや

紫きくく庵よ紅葉ちちて終すこの月ふ冬の山さと

新古今

冬の上てよそあら玉月きうつ秋下この月と結ふ冬分

きこえてねぶ（すい）あるこゑのたゞよひ行くへ八こゝろすさ
まじくて行かゝるしらなみの玉のをとゝ
五せ飛よ果うる氏のてゝゆくつるねもあつぬ風の音
きこえて夜ぶかくなりぬ
すむ国と木葉信よせ一つきて色を染てはよりる
あしのたゞ葉すはよりおかはえよかゝふ（なきをきはてて）
（後拾遺）かはくきのちるふる枝のうゝ者をまて隔ゆに雨や降らん

（新後拾遺）
はつきをてらわよりへき秋山の月八雲をや埋れぬらん
ちはふるきてすの有らかゝふとあやふく雲の外まやふ
風をく成すはよわれ程の山乃星井八こ者ま（なりの）ゆよりと

こゝにたゝるよかゝるわかる者（きく）ふかしのうねは思をや色
秋八てゝ志ゝ花わすゝ口つゝ八者（そく）のたすゝ志ゝて
ひさ木せるあらの川の底ちへ（ゆく）殘らす者（ゆく）れ果よりわ
あしかのきゝる岸へ（の）閑わゝ侘く成行者て有る
ゝ口ゝ世八雁のゝ鳴ねよ者つわ（ゆく）さ白山のたゝ八つ（に）ゝ
者（きて）八きて者（ゆく）ゝ者ゝ吊て行ゝ者わのゝ者をゝ（ゆく）
志つのゝ月乃ゝけの衣ゝ乃ゝ（ゆく）あゝみ乃ゝき者八乃ゝ者さゝ

十一月中

（後拾遺）
冬乃よ八雨のゝ者ゝ打てゝ行わ者（むわ）ゝ者ゝ水し行て者ゝ者ゝ
（新後拾遺）
冬者のゝ行ゝ人乃ゝゝ雪始ゝゝて者ゝ者ゝ者ゝ
夜八者ゝて根床ゝ乃ゝ左ゝ乃ゝ妹ゝ者ゝ者ゝ八今ゝ者ゝ者ゝき

霜結ふ夜ふかく起居て冬の夜の月うしろにも袖ハわかぬ

ちはやふる神すら嵐のなかれも雪ふりて新山人

秋すきて風はらへし冬のさむけしきに

ゆふ山雪ハひまなく降しけは次のけしきもさむく

奥はまこもはひとえすもは浪ちたつ舟人

まちかねて妹やねぬらん冬の夜ハ実にかた枕やゆかし

久方のあまよりの時雨つゝおのかしくれも

十一月後

さ夜ふけてあらきは嵐袖てへ

けさよりはしもの夜もすからあたま衣うすれて

深くしも嵐雪ふりて

炭竈の烟よあかやへしつゝちかねし

はかぬるゆふへの袖て

降りふき雪ハ冬の明井よりそ

大原や小野の炭竈冬ハ

深山庄の松の枝に雪

あさ山志きみか雪

十二月初

うちそくかかき松の木山の雪やつもり

あさ…氷

君か代の園の枝の…

三山にはゝ山の嵐あらけなるに高かさ沙れいとかはり
山人乃家と結つゝ其の庵雪ふるこゝろて行ふへき
ちゝ[illegible]ふあの松ぬ家とあるゝ[illegible]て行ふ人をなけ[illegible]
埋火の下よ浮身と欲つゝ人なくきゝゝんこゝ[illegible]て異ふ
[illegible]こゝろ[illegible]ぬく山をこゝ[illegible]なく雪ふ[illegible]て
[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]の[illegible]の[illegible]
氷[illegible]の池乃こけつゝこれかゝ[illegible]のゝこゝて乃ゝ

十二月中

風[illegible]雪霰[illegible]こゝ[illegible]よ伊[illegible]ふ[illegible]
[illegible]山[illegible]ふ[illegible]雪ハ降[illegible]
[illegible]山の炭[illegible]ぬ[illegible]

雪ふ[illegible]ゆるきの杜の枝つゝ子ゝ路のあかゝそ異ふ
[illegible]すゝ清の[illegible]氷閉ふ[illegible]ゝ異よ沙わ[illegible]
[illegible]の雪[illegible]人ハ[illegible]の上ゝ異ふ[illegible]
あゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
都[illegible]ふ[illegible]雪[illegible]ハ[illegible]人あゝ[illegible]山へ乃[illegible]
大あゝきの杜[illegible]の杜しなひくをたすけ[illegible]き[illegible]の[illegible]

十二月終

年ふ[illegible]の玉[illegible]
[illegible]すゝ[illegible]の[illegible]雪[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]の山風
[illegible]の氷[illegible]て玉の[illegible]ぬ[illegible]

於[illegible]杜

すの河やそのほとり（たき）に氷やせこよ行ひとりたる
かたしきのひとあそあつぶのかなときこあて別（わかれ）中そかのき
於箱根　山本紀名メなこわつて（つて）きこそねふ（うつ）ねの炭焼
うすきその上そよ雪のあわしくハつをもふきうかそ
かそふ小こてらへよりとし月れ雪つりうん（アケイ）方やいつ小そう
しとうおこうひあまよ（ふ）ふくくうふこう海のそもむ（ふ）ひ
紀名　玉名ふとしの後よ成よりわふふ（や）きそ（し河）あそんとすこ

序

あくこそ（ま）ちとしの乃こそちよはまこそ
て。春そちりかりかそ（ま）ひ（ま）しこうね。秋ハ
落る木葉よこそ（ま）ひ（ま）こへ。こそこう

きりをもてくふるもむひ。そこそきひ
しきやとよりうりかてあれこそや
とのひりれけ。ふもり月乃影ふこへ
く。ひこくハくくこくこそ月はひのこ
ろもくす哉。あもきれ中つきあわ乃
き。もしきれたふこへたもむて。
もくくよのこうきよ杉こなりく。
あしくゆふくるこきあきんのう
ちよ紅くする。あくあしこそ。ぎこる
こへたこる乃色こおとこよ。こる
ハ。色よりくくこうこのこをなこめ

つゆしものはなとちりしくいでつ
きえるまじきものにかはりつゝよ
そらにみだれし。はかなしのはなをくら
し。雲みだれ玉乃風かはりやまぬれ
き。水の泡かしこきよ。春の夢にて
けなしよきのふかうしたがうのやゝと
も。かゝる浅茅か原を露志ふくて。
あしたまうかし玉のとかそて。夕
まへ八重葎よりでゆ秋て。きりの露
のきえてもろく。こゝしまくしも毎
なくなかりしを。さそはれてはかなぬる

くさのあとなきまでかれゆきぬらん
かはらつなくさらんはてもしちるかな
をたちてにはらはぬ。あさまし乃こそよりひ
はふしねて。さまよひやれ。三つ乃社の
山乃松風なる。ききくしくぞ成
まつはは。松乃木の千年かふる丸。
結まは枯らちめるをや。影かのうさ
ゆきましもかれうせぬそはて。いける
らうかしかはうてもつるかやく
もとなく半さりも。つるまむかし
く。こゝろまをふゆしん乃もつつき

みちてなりゆきを見ひなすきてんぷろうまて
ちするあしきしらまして推移しつて。
もくしすりぬるくしるよしんぱおは
よし出るゆとつけとくはりしとぱいつらそ
わか身人とひとしきなくいふなり

春十

きのふまで冬こもりせしふる山は春へに霞たちやらて
新勅春上
今よりは今日は春へに霞ふる雪の消えはしなかしぬらんやは
春日のあれしの原春をこそまてと雪とけゆきて　続ハ集
山ざとの梅のにほひに春きてハ木すゑにつもる雪の下風
おもふまじやわかやとの春の夜ふかき園のつほみそはなはらず

ゆきしこ今朝の朝日にひかされてなこりの雲はゆき城
ぬき金る霞ぬふてくるあるこそ秋のはての山かにたせん
花さつて春の山へによそにてんふらすまし家ちかうすいあくらは
庭の面に芳の花の散るこそは春まてもきえぬ雪とそてころ
まなうら花にとうすも同しこと折てらへらん此心の早蕨
むかしこきくるよ秋あて春の野の若なのわかえ切てつみ

夏十

新古夏
春くれて夏にはきのふいふのまよりふい山へ乃すくろかつるむ
花ちりし庭乃木のまもしけりあひて天照月の影そまれなる
夏衣きてゆくまもなけれハわやとよ山郭公まつこころ色せめ
蝉乃ちのうすら衣に成にけりなすと打けん山へりくまれ

華さふせなの早田をうゑて入もせしすまかすゝむるぬらつ
ちはよそしおもあらぬ駒もあまりしてかつくるゝの野は成よりわ
さ月やみ雨戸の外の里もとて花橘よ月影の付はりふ
夫木秋乃三中
夕かすま大ぬの原秋も鳥の影さへしるく照す月かけ
三日月のかこしや立ふんすひあらふ秋もゆるさそ
おつりく吹ちる風まかりはく上のてはそてくるすしるか

秋十

新勅雑上
さて麻のかり婦か衣すそふきぬれは外山のかけ秋風そふく
新古秋下
秋風乃ふく夜のあさりはかへりしはかなく宿にちりける
新古秋下
山里のさゝの笹のへそよくはきくも乃袖をしそてしくし
くろかみの乱涼しく成時は惟そこひねの夜かへさぬ

新古雑上
山ふかくすむいほりの松垣のほかく秋はこのそてのすさまじき
夜はきりのあけゆくころ秋きまたからとはたちて
続花秋
遠山田かなた打色よりわ今はこかわもあかあすらし
くりかへし山陰よそろ松いく秋風よそかしきみえん
はるかにも風の音も涼しき妹か家路のかへしん
松風のうらさひしき秋すきにはくの世をかんやと

冬十

かつ佛山のこれを切てちてぬさしは風のちりよる
あけゆかし蓬乃垣の防にさいくぬきの冬よ陰わかる
続冬
久木せるほさの霜て冬はしうゑの床ろ脇はよける
白雪のふりけ冬てかさかれは月は年のつかき入り梁

かこうと水の底よりぬく成行をそなたに有うか
神つ代ハかくよる成よりわあねこう国より神代ハ
ふけるとて人まてこそ人きしたらハあらの高よ高ハ玉
いたるとゆてけて、のかこうこそ
うたさくてちと野しと国のたてつハむとて底より神代ハ
佐ハ拾新下
生うせさすとこの河の上水ハまそおくつねるこぬ世を

歌十

彩古歌
ハ
つきこうのうしの玉すちちかいき歌
歌ハ
まつるゆ弟の
まつろ雷うはけてけうてちせハ
イ合月

ハ於歌
あちきるの彩よりす物ハ行う有こ歌をしんけ
侯古三文
きこと歌うんハちよくこ
きこうふとひくこ
ゆこ巻ハ彩けの戸人
つ歌ハつけてるくこ
ちくを世天乃
人のんの乃あこを彩こくこ山
乃井よこうねこやこあこは
まこきて行ハつる行こ行ハく
のんけこちる行ハゆここ行

志ほしらるるうへ
あはれしと歌く物うたあしを同ようきて世ゑ式
さうさ川園いせようを成よりし水のおうしいおくおうよ
くたかんぬちよてきうくんをうぬけ おうしを
八橋のうてようその式ふ式神八河のふちうるーて
松のうれうわ乃神八年ふたううくきあるなよ
うよてうすんの周よまうひてうしこう世よううひさ
乃ふうたしうつ多式歌くうよ日うとうく成り
さし時やおうこの山乃おうこへてうよものうぶたうや
絵いやはよいたせまうと思ねうてうこようの山ひこ
うう世よてうれすうち千世ぬうをかくしかう式つねうぬ
世の

爰にても思さわし式白うをのかう浮世よすうひせむとハ
ふうはわとけうわうしてたうわのなよたうう日うこうか
やへむてうたけまうれうふくたんむーの人乃うをうそ景
九小雲たけまうやとの茅の上てよ玉とううまておけうーつ
乃ようにはおそうのうぶてこ立の久しくよりふ大おうてこ
力ての山と所おうこけうへき式ふ形へそそ景の白くて
後生のつのくむ芦乃なうとうるようき世中ハ住ううわうう
あしいふうふおうしを西ふ世中よ日うう多ひうつハ住日ひぬやい
さうう川おうしてうの乃てこすハ住ようせうーせのう玉
茅おうこふうこの里ハあしぬうんこてうよ日う世の久よへぬした
花すきなよ出てうんすまれくふーのうむうこのあうき

後拾遺抄中

古集

けしきの間の海よりつたう水の泡とそ思ひきこえぬる

千載

ひさかたのくもゐよりあこうしてけりなぬそのなかそ思へ

ひしりこゑ今ようふかしあはれ人くよあはせ有やなを

ふやるつつひきいとあはれねまよるこすしやうあやしさ

そらつやく浦よ海士やうしよりの人烟こそたえすしるわれ

右卿ハ有しさはるすあしかりけれ人くの間てきこうや

りとつたよ今ハうまわとみしとわ祇るすしうふうとこ

乃ひせ一函の春うわあさはよ毒ひく有式淀のまこそのの

ひさくて月はをのこそるつ元ひるるて世界一切衆

同意

ゑのあるうしうふうよそもむるあるちよ人ひつらうと思ふ

きの乃え

ふるさにてつりうるつ松の本乃えてさすよ春よ成よ乃乃式

結合

色ふく世ハ成よりわあるあるあるあ伊吹のと山雪ふわぬら

きのひら

い乃え

あふくやちよふ川ひろうるうるはのえとあけうるぬハ

は乃ひら

ひあらて思ふひの手ふうひ有へうてあるよ成ゆく

ちちのえ

秋山国のいちのえとなよ知称ハ人日とつよ志ひとそ思ふ

ちちのと

人秋のこそにてそうつちのさきう山うねのひひハの仁てそうる

うれえ

いとゝもあらぬ世中のうとましきようなるぬうよ

うぬぬ

人まこゝろのとゝまりがたく世はあはれ

こつのえ

いと水のうへにあくがれ川のうへにて人をまつ

こつのえ

あまこちうりの舟にて舟をいとゝ

一日ちうり

はるかくひとゝひちうりよりてふ舟のやうやつこうと

一夜ちうり

うきあらはるゝこゝ有へてゝ世中の一水ふるやうん

ひんう

古郷のうしろちうこちよ打思ひいもうき祢ゆるく式

半とつゝ

浪のうりうりの浦乃うつを見ぬしきうゝ

浪は捉

こゝろ

人ハうゝうしきゝ世ゆゑ有ハあるとなきハうゝ

ひつしさう

独はつしちうゝ哀ゝ

けう

さゝ山の錦おうんゝ風ちうゝ

いねな

山吹もまさちらそうる春といふ井手の蛙よ身をやなさ
きこと

をたてもせて四き新うよへ行よ身いこつ〻を老うしる
うしやうう〻

世中ハうしうい〻行ハ有へ人やそもの所ふこそて

ちらねうこと

立てさ紙をさあらてうんうよへてこうやせうを徒そし
思ひたるふるやの軒の忍草ふるしまし風ふくうるをこそ思へ
ニハたうひうて世紙をうる失ふるの作て立やはうこと

四て人ハ思ひきりて富士川の今よすてぬ何乃ん
須融院乃御さへ乃はあ〻おくて
ア〻いうこと わしてさいおア書てス
乃はて下つわらる

なちの浦乃内外の清ハ浦さしそうよ世紙四ろ春の〻立
やうあ紙ニうを乃松あ〻こ分ハう
〻下やうるうるうるうるうる浪乃ろ
けよ有せハもつ〻きれ大ろや
人ろうもうしあまし乃ん
ろあふ乃なもう野乃ハ何をうねるふ
命ろうもふる

ちちの海と名ハ八ちたの松ハ仏ゆらしてそよぐ辰
白浪のうつき有セハすらきの大文人とちわりしあさし
志かさしくなるようあふこそわせハ波ねる命しる姫
ちちの海ちとにふの孫よあるねは雨風ふるすたてる
世のうきふ春をあらぬ山への埋ハてゆめ谷川乃水
谷川のなるる此塔よりもぬしちにうるて住の江の松
住乃江の松ハ神かる名ハるようへハ物ハ思ハ
思ハしや名ハ八つまぬ物ハるわ物ハ思ハ
源乃順ハ
あるたちん世こるハ
あむなるわちちの海乃海ハ

半てつるわ中行ゆかて
つるるすいハてしるる
ちるん光。こるるあるて。わ
ちをすセ。ハるをしるるてて。
ん乃ちちよハるる。言のて
よ形ちし。思ひてつるけるる八。
ゆ乃ちちるるなるる中よ。
ゆる風乃海乃風をちち。形ちの花
乃ゆふへ好ちわちちる
き世ハて有ハてしるる。岩下の
水乃半ちちかるる。青柳のハるハ

くわうこうしたぞうあんらかて
ちりうこぶつすつようくあきさ
りこのきちうちようぶこの世乃
ちこうみしすぶかはをうしたくふ
きりこるあこしのこう世を
うつる。雪を拾ひ。雪はあたておく
くり年はつるひしあよ
分こそあしさはかうやあこの
めすきこうもいへぶたチ
年のれるこうなもらふこと
はけよこれきこうこきて千年の

法きあちよなこのいねそと
りこも物はせんこきき年はそ
ん有こりよいひるして世こよ常ふ
らぬ世はこくきんこおこふて
しあしむねのおもこけんのれて
ひしきえぶまこさふのれはのこ切
て月りこうこはをこきこんも
こふし。ぶくこ春こはやよ
くぶこちもこる秋もれこうこ
すぶこへめる係の独ぶこのひよ
落るこしる井り同よこうちる

りる秋。春は秋をんうしはあれども。
今を盛りとめ給へ。うしは乃すき
をあらはやあしてふしはをほふ
なりけり

春十

山川のうすらひふるてはの春人の風やうやうと
うねひ山のたに霞をうに春ちかきよりるんちうをはる
東路の行ふるの春をてハ花をてんやうちうやうや
ふるとの雪ふりきてはまちハはやはるをきをて搗
をはるせをるの若をかをちをる根をを春ハ知るはし
子はすをうををはるをふりをる世ハ初めるふを

春ハ花をや拾てを一本の花チをををはるをんをふ
作田川井てあるをのをはをはをはをて春をはをはを
あをの山ををををはををちをはをはをはをはをはを
ををはををる春ををはをはをはをはをはをはをはを

夏十

夏の花をて春をハ夏をををはををををををををを
はをををはをの山をはをはをはをはをはをはをはを
大をををの小ををををををはをををををををををを
はををををを小倉の山をを家居をををををををを
ををををををの川波ををををををををををををを
夕闇をを海をの漁火をををハ色の花のをををををを

陸は於き之
好忠

岩清水しるしなるひつてのつきのすゑ下ながれよりくるふ
天月やこ[illegible]尾ふもと[illegible]蜂のすゝく色きけたるるぬぶ
夕きよやこ[illegible]ほとゝぎすのこゑ六月のあとのこゑ〳〵せてやるこゝろ
おなじくこゝろのこゝろ方ぬをこゝ到てんの内秋ぶて思ふ

文永五年

秋十

秋きりのこゝろつくすこゝあてゝよ秋きの風の素衣ぬ
ぬぬしこゝろのてこゝつくさ姫のこゝ秋せる山のこゝき
紅葉かよ出しまこゝきたくおゆる秋ぬまこゝけるこゝろ
山田ちこゝかつて今ハこゝるこゝ舟やこゝこゝかこゝあるわ
白露の萩の上こゝる玉ぬ彩ハ乃のこゝ風もゆしこゝこゝ
杜人のおこゝこゝわ世ハ秋山ぬ乃きこゝて今きこゝ第ハ

こゝ思ふ世中のつゝハこゝぬこゝの色やぬ思ハ出こゝ
うこゝふ月ちこゝきぬこゝ思ふすこゝて山の秋こゝわ
あこゝのこゝあしこゝこゝ方こゝすこゝ秋こゝ一つ八

冬十

冬きぬこゝハこゝて彩米結ぬぬこゝあこゝこゝ思ぬ
彩ふく好忠こゝ菊の色こゝみしなん
ぬしこゝの羽吹やこゝゆきこゝぬこゝ思ぬこゝ
きこゝ鳴ぬこゝおこゝひこゝ冬義こゝきこゝのこゝ
秋ぬつきこゝ未ハこゝ成こゝわこゝつこゝぬこゝ大ぬこゝ
こゝな月こゝこゝこゝの山ひこゝる冬第ぬ風のこゝ白こゝふ
こゝしこゝこゝ花のこゝ冬ぬこゝこゝ冬義こゝ年こゝ

秋十

はるねさそふるきゆの雪ふりわきてやはるの風なる
春てハ氷とけぬる人ハ水の下をくゞりておとをけゝるふ
うの内よりハ行末よりハ打出ひ春ハ山ハ花まきちらしお

歌十

名よ出をとゝ人をわぬ(ミなと)ハ花ハ上そつ仏おき
ひるまをく夜ハ花ハ上そよ行すのこいしの(げゝ)のこけをこの
うつまをこの世のしら浪をちかへて立てとゝ花を社思へ
うてもなのひをくハいふへき秋なの中まも人をうらゆ
いつかわよをハすちをつかぬ雲よをふ秋ぞそいてね
はのゝしゆくちをよおもはしてこゝろをくりさををれは
神よ落る玉ハ山をうゝ落すをつ仏山を成ゆのを

天不ぬちをて住七夕をとをの秋をふんう毎
出ふをくをの秋乃つををるしや毎ハ花をたをん
ををひて一をを号世年よあんをやいつををを
こゝ山をあさ山ををを
あさをしやはをの山をををををををををを
ちをを川せ乃住木秋をををわ春のををよ
をををて寄ハきぬをる門のかををひ春のををを
やをちく花をうをしををすれををれをく
春をくの花ぬををををわ春秋をををををよ
数やわひのをよをしてをちやあ(ある)をををををを(ぬ)
ををふやをわハをの秋よををを出ををあををををを

はなれてその思ふ時ハ何やらの鳴蛙さへよくきこえしや
へ流れよとて母せんとおもふも聞えの芦間ひとつてあまの篭の
ことわさなることそ皆はしたなしもよ柳下恵のけき言の
好色のけそくわつこそ先生ハ秋のはしめよる物さす色ハ
菊のつくさらかはかき蓮なるよそへは物よりてにたる
やそのの紛ゆひハ秋のくよ菊をそへすすまそてよう
侍るよ思し秋ハ空よりわ声くそてそゆる萩のしたゆ
形も山も夕ぐれは風そこはそ聞えたれよし皆子
井せさこわかる水の音乃聞えぬハ先きまよりれ氷すらし毎
軒なるる梅咲なとてハうれなん形なれる雪や何なるかり
あらた玉の年もはやも老ゆわかん細くてそゆるくすのい

新後拾遺春上

はきすてたぬくめやそ春きてハいつしかな櫓へき声なくくの山
もの春ハ何せしくらむ梅花なすらく数ゆるかそ
好忠
むかしなる人侍るとハ思ひしとこそくやこゆる何か衣のゆハ
いそひもひわすく物緒をふすのハ胸もちつまそそくへらす
附のあしんきてる豆しきハ後つき物なく人ひよそ思へ
ひしなれこおりて音ハつれなきを下らしとは云つらめやへ
とふなる思ひにもとりひてあちこ形く人ひ作るもの何かあさ
守山よ歌ころ出のハ音よせて綱もこめ思ひよそたく
ふく丸の何よ向ん玉ての流てこうん糸とおもひや
その思ふよくるしきよハちにも明えみよ合せ何かの乱
乃ともなる時こそ有ゆ小家の山いつかハさしんかゆる色の

かく立んとて知せハひあらんへよんにつらるれ
たつよんよんにつらるわうそれうよ志ひつらふ
きたえ
男子の浦乃ひつもとんとしきのそのよへてるわらへ
きたえ
さ夜更て何ら志きのもとにてそ一へとそ一ちきやと
ひけえ
ひさうしさとうの志のそのやうやうたきちきし
ひたえ
ひは松さわ石
きのふさ志ちわせ一ふ
ひたえ

一はやくすぎ
[illegible]
一夜ちぎり
[illegible]
[illegible]
ひんて

玉葉愛二 須

[illegible]
[illegible]

[illegible]三室の山のもみぢ
[illegible]
いまわ山[illegible]
ひつしける

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

玉葉名月

いまやまさ[illegible]
いぬる
きていねねて[illegible]
きて
世中よかりぬるかくてぬるきてこそ花のわかれ
[illegible]
[illegible]
此外のうしろ[illegible]

河原新下
初秋

水上のちぎりあてにしかこそ世よ二ひらの堀川乃水

物ゝ[illegible]所すてらるる
[illegible]の徒松千年ばかりを思ふ
すゑ[illegible]小藤の[illegible]ゝ[illegible]人[illegible]ゝ[illegible]

於[illegible]下

拾遺集巻第六別

[illegible]

[illegible]

同巻第十七雑秋

[illegible]　曾祢好忠

[illegible]

詞花集巻

[illegible]　曾祢好忠

[illegible]

新勅撰集春上　　藤原好忠

[illegible]

此歌家集にはなくして六帖第五
撰乃言にて作者なきとなす京
極黄門何よりわて好忠と云ひし
したがつてこれを撰ばれ
袋草子云後宮集云春のはまちかなる
ものとしらずしてきゝわたる酒
乃とゝ作りなる紅梅ゆゑにあるとて丹
後掾曾根好忠かゝけるとゝ

[illegible]

[illegible]
紅梅ゆゑにくるめるいろをとゝ
[illegible]
[illegible]
右此一首流布能宣集不載之坂上五首今考加之
重之家集云そねのもとたちちかよく
いつしか[illegible]
[illegible]
此但馬[illegible]

文本抄云　好忠百首ニ
万代
あつかりし春やきぬらん
圓融院御時子はしらの
なまるほかのくさいあるしるしなり
ニつつかりの世ハ乃幸大殿よ奏しく
ふるしの好忠ハ先祖赤袴ニ万ニ伝ふ
ハ世ほとりくく七人乃ニしるのゆま
いまほんのりけ象集序ニ
つしね乃絵乃絵
ちの保れ順ニ
ほなんしふ

所ニてハニつかよりくくの後の
人乃ニりくくニ
ニ抜ニきくあむ
乃ニは叱の
梨壺乃天人の中ニ
本人なるよ
ニれくあまれ
くものれそ
ちみ
しるあ
めてかく

このほかは初一し此序乃後の哥
乃中ニ集ニ入たる哥六首あり其の
中ニまりん〳〵しとほしとゆ〳〵ある哥は
玉葉集ニ出たる其の哥として乃さし〳〵
ことさらくわさまくほくわけ多
のしくしかうたしとも有しといふよしあり
下三首の哥ハ後乃人のひろひてくわへ
たるなり此初ハ下河急も流れて何
かしこうつをしたは又あるなまぬかて定
同抄ほし拾遺集ニかゝり新後
古今集にいたるまで乃十九代の勅撰

よりたる哥ともおほしくあふ作はつか
なまほしおほゆるハふうきるよありする
こゝろはれはいうしハきんハ

再考補遺

夫木抄三十一　寛和哥合　好忠

初しくれふるの山里いかならん住む人さへや袖のひつらん　（新千）（新拾）

此哥新千載集冬部ニ入寛和二年厳
上哥合ニよりて人しらすとあり

曾祢好忠家集終

元祿第八歳次乙亥孟春布沙星日

書肆　浪花　小嶋勘右衛門
　　華洛　中川喜兵衛
　　鏤梓